＊M0724H000YMACC12070900000472＊
２４日付　山城Ａ朝刊通し　◎Ｅ・新随想箱
２０２０年０７月２１日１９時２１分５９秒　ＩＤ＝ＣＣ１２０７０９０００００４７２
ＰＤＦゲラ出力　箱組　校正回数＝６６　７９倍　０×　２３行　０

随想やましろ

手放さない自分の暮らし

門阪　庄三

11年来元気な男性患者を検査した直後、「がんかもしれません。外科で手術を」と説明して今後のことを話し始めた時、男性はいつも通りに落ち着いて私の話を聞いてくれた。帰り際には「病気を見つけていただいて、ありがとうございました」と礼をいわれた。

しかし、残念なことに翌年、がんが再発した。その時、手術の執刀医に「あとどのくらい生きられますか」と、自分から尋ねられたという。

最近はがんであっても病名を伏せることは減ったが、余命がどのくらいかを告げることはまだ少ないように思う。新しい抗がん剤が出てきたこともあって、最期に近い段階でも抗がん剤を使って治療、もしくは延命を求める時代だ。男性のように抗がん剤を使わず余命を生きることを選択する人は少ない。

今は人生の最期まで選択を迫られる時代なのかもしれない。選択できるから素晴らしいかといえば、必ずしもそうだともいえない。高齢といわれる身には、リスクや自己責任といわれても、正直つらい。病気の治療法やついのすみか選びなど、一般の人にとっては実のところ、簡単ではないと感じる。自分が当事者になった時に、果たして合理的に選ぶことができるだろうかと自問することがある。

男性は私に「最期は自宅で先生がみとってください」といい、実際そうなった。だが、それは決して「ひとり」で決めてできたことではない。男性の歩んだ人生を傍らで見ていた家族や友人が、この判断を至極自然なことだと同意されたので、それができたということだ。

男性は自分の人生を最期まで手放さなかった。いや、最期が見えてきたからこそ、手放さないという気持ちだったのだろう。時には教会の日曜礼拝にも出掛けられた。好きなお酒を楽しむことも含めて、今までの生活を約1年間続けた末、日野の山を借景にした庭の見える自慢の部屋で、静かに亡くなられた。

（かどさか内科クリニック）